

県研究主題

多様な音楽活動を通して音楽文化の理解を深め、音楽を愛好する心情や豊かな感性、音楽的な能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 村越 美樹子（湘南三浦地区）

<研究主題>

日本の伝統音楽に触れながら、構成を工夫して音楽をつくろう ～篠笛を用いた創作～

1 提案内容

音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養うことが音楽科の目標であり、この目標を大切にしながら日々の実践を行っている。

創作では「音素材の特徴を感じ取り、反復、変化、対象などの構成を工夫しながら音楽をつくること」を全ての生徒に達成させたい。しかし、楽譜で表すことに苦手意識をもつ生徒が多い。

時間を有効に使い、生徒が創作活動を楽しみ、意欲をもって取り組むことができる題材について考え、実践した。

（1）茅ヶ崎・寒川地区教育研究会音楽部会での各校の取り組み

- ①ソプラノリコーダーを用い、楽曲の一部を変化（創作）する授業を実践。
- ②リズムを中心とした創作の授業を実践。
- ③リズムカードを用いたパターンの創作。さらに音程を割り当てた旋律創作を実践。

（2）本研究の概要

①題材の目標

創作に興味をもち、主体的に音楽をつくる。構成を知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じ、根拠をもって創作する。

ア) 反復・変化・対照の構成を理解し、それらを活用して短い旋律を創作する。また、篠笛の音色を味わいながら、日本らしい音楽の雰囲気作りを大切にする。

イ) 周りの作品を聴いたり、アドバイスをもらったりすることによって自分の作品に生かせるように工夫する。

②指導方法の工夫

ア) ペアワークを取り入れる

生徒間の学び合いによって、構成を理解し学習活動が活性化した。また、教員の机間指導の時間が確保され、的確な支援を行うことできた。

イ) 篠笛での創作活動

篠笛の記譜はシンプルで、音楽経験の少ない生徒も取り組みやすい。毎時間少しづつの取組で発音も容易となり、その音色から日本の伝統文化に触れる機会にもなった。

ウ) 3年間の創作活動を見通して“構成”を用いる

1年生で共通事項である“構成（反復・変化・対照）”を理解することで、生徒の学

習意欲は高まった。3年間を通じて篠笛の発音数や音色もよくなり、一層表現意欲が向上すると思う。

### ③評価について

#### ア) 音楽への関心・意欲・態度

反復・変化・対照などの構成などに関心をもち、それらを生かし音楽表現を工夫して音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。

#### イ) 音楽表現の創意工夫

音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す雰囲気を感じながら、反復、変化、対照などの構成を生かすなどして音楽表現を工夫している。

#### ウ) 音楽表現の技能

創意工夫を生かした音楽表現をするために、必要な技能を身に付けて、音楽をつくっている。

### ④まとめ

創作の研究を進めるにあたって、創作活動の大切さや面白さを改めて感じる事ができた。研究を行う前は授業時数が少ない中で、どのように創作活動を扱うのか、生徒たちにどのような力を身に付けさせたいのかがはっきりと見えていなかった。しかし研究を通じて生徒たちの創造力の大きな可能性を感じ、授業の工夫をすることによって短い時間の中で行うことができることに気付く事ができた。今後も、技能の定着と生徒たちが自分を表現できる活動として、引き続き創作の研究を進めていきたい。

## 2 協議内容『学習意欲を高める学習指導の在り方（我が国の音楽／創作）』

### (1) 我が国の音楽（表現・鑑賞分野）

- ・伝統楽器の取り扱いが増えてきている。
- ・鑑賞分野や地域に伝わる民謡芸能、学校行事などと関連付けて取り扱っている。
- ・3年間を見通した指導計画が必要。演奏の習熟度が増すことで関心意欲が高まる。
- ・楽器の数が十分ではないが、学び合いの導入により意欲が増す。

### (2) 創作（表現分野）

- ・小学校での既習内容を把握し、それに応じた指導を展開することが重要。
- ・音楽を形づくる要素の構成（反復・変化・対照）を日常的に意識させることが大切。
- ・1年生から3年間を見通した指導計画が必要。
- ・構成要素や習熟の度合いなど、生徒自らが気付けるような“仕掛け”と評価が大切。
- ・メロディーの創作は、記譜や創作した作品を演奏するなどの部分で、生徒にとってのハードルが高い。関心・意欲を高めさせる指導、評価を工夫していくことが肝心である。

## 3 助言

今回の実践は、伝統音楽を専門とする音楽科が少ない中、授業者が自ら試行錯誤して作り上げてきた授業である。篠笛の演奏時にも、息の使い方や身体の構えなどにも気を付けて演奏させたり、伝統音楽と創作をうまく関連付けたりすることで、生徒が篠笛の演奏を通して、音を音楽へと構成する楽しさや喜びを実感できる実践内容であった。

**<研究主題>**

主体的に音楽表現の創意工夫をする生徒の育成を目指して  
～中学生の読譜の能力に着目して～

**1 提案内容**

音楽表現の創意工夫をすることは、より深く音楽を味わったり表現することを楽しんだりすることにつながると考える。その際に課題となるのは生徒の楽譜に対する苦手意識であり、楽譜と音との関わりが理解できていない生徒が多いことである。生涯学習の観点からも、読譜や楽譜の仕組みを指導することは重要だが、時間数も限られていることから、系統的な指導ができていなかった。これを課題ととらえ、生徒が表現することを楽しみながら読譜の能力を身に付け、主体的に創意工夫して表現する生徒の育成を図る指導を探った。

**(1) 実践内容について****① アンケート調査**

現在の読譜に関する意識と能力を把握するために実施した。読譜の能力を身に付けることに高い意欲を示しつつも、リズム読み・音高読みともに、課題があることが分かった。

**② 「音楽エクササイズ」の実施**

音楽を形づくっている要素を知覚し、感受しながら身に付けるため、毎時の活動として授業の10分程度で実施した。「リズムの模倣→自分でリズムを作り出す→記譜する」というサイクルで繰り返し学習した。当初は音符の代わりに「タン・タタ」などの擬音や、記号を記入する生徒が多く見られたが、回を重ねるにつれて音符で記入できる生徒が増えていった。

**③ 検証授業**

検証授業では、自作の短い歌詞にリズムと音高を付け、言葉の特徴を生かした4小節のオリジナルソングを創作し、五線譜に記譜して作品を友人と読み合って演奏することで、工夫をしながら楽譜への興味や記譜・読譜の能力獲得への興味や必要感を引き出す場面とした。

**《第一時》言葉とリズムを結び付ける**

個人でテーマを決め、テーマに沿った短い歌詞を作り、言葉をリズムにあてはめて4小節のリズムパターンをつくった。多くの生徒が、同じリズムの連続だけではなく、工夫して変化させることができた。また、考えた言葉が既習の音符では表せないことに気付いた生徒が、新しいリズム（3連符や16分音符）を取り入れる姿が見られた。

**《第二時》言葉の抑揚をいかして、前回つくったリズムパターンに音高を付ける**

前回つくった歌詞の抑揚を調べ、それをもとに五線譜に記譜する。記譜・読譜が困難になりすぎないように、使う音高をド・レ・ミに限定し、一番強調したいところ一カ所にファを使った。

**《第三時》楽譜を見ながら演奏し合い共有する**

4人グループで互いの作品を演奏し合い、代表作を決めてアルトリコーダーで発表した。また、楽譜をスクリーンに写しだし、全員で歌うことで作品を共有することができた。一緒に演奏することによって、他者の作品の工夫した点について考えを深めることができた。

## (2) 成果と課題

### 成果

- ① 毎時の活動「音楽エクササイズ」を継続的に行うことで、生徒の実態を鑑みながら指導法を工夫し、リズムや旋律を知覚・感受し、読譜に結び付けることができた。
- ② 創作活動において、五線譜に記譜し、作品を共有する場面を設けたことで、読譜の能力を獲得することへの興味や必要感を引き出すことができた。
- ③ 作品を他者と共有することで、音符や楽譜の意味を理解し、自身の作品を改善することに意欲的に取り組み、表現を深めることができた。

### 課題

- ① 読譜、記譜、リズム、音高と学習内容が多いため、教員が説明する場面が多くなりがちなので、生徒が作品の工夫や良さを発表する機会を多く設ける必要がある。
- ② 生徒が他者の作品を評価する際、音楽の内容ではなく歌詞の内容に着目することが多かったため、音楽の内容に目を向けられるよう、音楽の表現の技能や、読譜の能力を高める指導が必要である。
- ③ 学習内容が難しいと感じて創作への意欲を失ってしまうのではなく、読譜を創意工夫するための手段として捉えているか注意する必要がある。

## 2 協議内容

今回の授業実践を受け、質疑や情報交換を行った。

- ・PCなどを使う際の、各校の教材や指導環境の実態はどうか
- ・創作の授業を、何を以て行っているか
- ・読譜の指導の際、移動ド唱法を用いた音程感覚を身に付ける指導の状況はどうか
- ・創作の授業の評価をどう行っているか

などが話題に上がった。

## 3 まとめ

中学校での音楽の指導の実態として、歌唱に偏った指導が見られることがある。教員の思いだけではなく、学習指導要領の内容に沿って研究された今回の発表は非常に有意義であった。記譜をすることで、他者との意見交換や作品の共有ができたことも、生徒の意欲につながった。

生徒が生涯にわたって音楽に親しんでいくために、音楽の学習の必要性を感じられる指導の見通しをもつこと。小中の連携を密にとり、教科を越えた指導を行い、さらに生徒の力を高められる授業を目指して、研究を重ねていくことが必要である。